

2021年8月8日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「神は“哀歌と呻きと嘆き”と共に」

聖書：エゼキエル書2：1～3：3

エゼキエル書は、「疲れた者、重荷を負う者」に特に響いてくる御言葉であるかと思う。何故なら、書かれた背景がまさに疲れ切った希望の持てない状況下にあった人々に語られた神の言葉であるから。一人の預言者に神の言葉が語られて行く。ただ、どう人々に語ればいいのか途方に暮れていた。戦争で国は滅び、敵国の地に強制連行され、不自由と抑圧の中で生きるしかなかった人々に、どう神の言葉を語るのか？語れるのか？「もう神などいない」と嘆く人々に慰めの、励ましの、希望の言葉など持ち合わせていない…。

旧約聖書の中で「人の子よ」という場合は神から愛された者を呼ぶ時に記される。《彼（神）はわたしに言われた。「人の子よ、自分の足で立て。わたしはあなたに命じる。」彼（神）がわたしに語り始めたとき、霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たせた》（2:1-2）。神の言葉は、座るために語られるのではなく、立ち上がるために語られる。神は「自分の足で立て」と命じる。福音書に「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい」（マタイ 11:28）とある。ここでも立ってイエスのもとに来なさい、自分の足で立って来なさいと、イエスは私たちに招く。

神は《口を開いて、わたしが与えるものを食べなさい》と言う。神は何を食べさせようとしているのか？《わたしが見ていると、手がわたしに差し伸べられており、その手に巻物があるではないか。彼（神）がそれをわたしの前に開くと、表にも裏にも文字が記されていた。それは哀歌と、呻きと、嘆きの言葉であった。》（2:9-10）

さらに《彼（神）はわたしに言われた。「人の子よ、目の前にあるものを食べなさい。この巻物を食べ、行ってイスラエル之家に語りなさい。」わたしが口を開くと、主はこの巻物をわたしに食べさせて、言われた。「人の子よ、わたしが与えるこの巻物を胃袋に入れ、腹を満たせ。」わたしがそれを食べると、それは蜜のように口に甘かった。》（3:1-3）巻物とは聖書のこと。その巻物を読むだけでなく、「食べなさい」という。このことは、「自分の足で立て」「わたしのもとに来なさい」と同じように、与えられた神の言葉を読むだけでなく、知的理解に留まるのではなく、自分がその言葉に主体的にかかわって行く。自分のものにして行く。神は、私たちがどんな状況にあらうとも、「哀しみ、呻き、嘆き」叫ぶ状況にあらうとも、神は、「哀歌（哀しむ）」者と、「呻く」者と、「嘆く」者と共にある。

明日、76年目の「長崎原爆の日」をむかえる。もう二度と原爆が投下されない

よう、亡くなられた方々、今なお原爆の苦しみの中にある方々を覚えつつ、恒久
平和を願い、明日、午前 11 時 02 分黙祷の時を持ちたい。(神谷)